患者図書サービスからみた健康・医療情報

山室 真知子*

京都南病院図書室

Yamamuro M. (Kyoto Minami Hospital Library. 8, Minaminakano-cho, Nishishichijo, Shimogyo-ku, Kyoto 600, Japan) : Health and Medical Information for Patients by Library Services. *Igaku Toshokan* 1995 ; 42(1) : 55-58.

Library services to inpatients have gradually expanded in Japan only over the past several years. Most such services are available because staff of public libraries or volunteers take the trouble to go to the hospital to provide service to inpatients. Hence, there is very little information on health and medical care in the lending materials. On the other hand, a large number of books on alternative care or unreliable therapies can be found on the book shelves of ordinary bookstores. In addition, a considerable amount of information is disseminated by the mass media. The purpose of this study was to clarify the librarian's role when inpatients ask for appropriate information on their own disease and its treatment. At the present time, however, most hospital libraries do not include inpatients among their patrons. The library of our hospital was opened to inpatients by setting up a corner filled with popular books. When inpatients want to get medical information from material other than the books in the corner on health and diet therapy, these requests are handled as directed by their doctor. However, there are various opinions concerning the limits of inpatients' right to know, and choosing among them is an important task. Recently, the concept of informed consent has been attracting considerable attention and thus we are now required to reconsider how to provide sufficient medical information in response to patients'

I. はじめに

わが国において、病院に入院している患者への図書サービスの拡がりが見られるようになったのはここ数年来のことである。そしてその多くは公共図書館から、またはボランティアが病院へ出向いてのサービスで、貸出しのために準備される資料のなかに含まれている健康・医療情報は僅かと思われる。巷の書店には代替医療の本や疑わしい治療の本まで含めて商品として並べられ、またマスコミによって伝播される医学情報も少なくない。

患者が自分の病気やその治療法についての正しい情報を病院図書室に求めたとき Librarian として果たせる役割について考えてみたい。しかし、現在の殆どの病院図書室の利用対象に患者は含まれていない。

当院の図書室では一般図書のコーナーを設けて患者にも開放している。そのコーナーに備えつけられている健康情報、食事療法に関しての本以外の医療情報を求められた時の対応は医師の指示に従っているが、それによる患者の知る権利の制限をわれわれはどう考えるか。いま、インフォームド・コンセントが話題になっていることから、患者がもとめる医学情報の提供について改めて考えてみたいと思う。

*Machiko YAMAMURO : 〒600 京都市下京区西七条南中野町8番地。

(1995年1月11日 受理)

II. 患者と健康・医療情報

病気の状態が落ち着き、病院での長い時間をもて余した入院患者にとって読書は最適なリクリエーションとして喜ばれている。かつては患者が読んだ本から病気が感染するとの医学的な根拠のない危惧から、わが国での入院患者への図書サービスは非常に遅れがみられる。しかしここ数年来、このような感染の危惧もうすらぎ、多くの公共図書館やボランティア・グループが病院へ出向いての入院患者へのサービスが活発に行われるようになった。また、病院内に患者のための図書室、または図書コーナーを設けて、職員やボランティアによる本の貸出しを行っているところもあるが、いずれも患者のために準備されている本は、小説などの読み物の一般図書が殆どのである。患者からのリクエストなどによる健康・医療情報がどの程度必要とされているかについては、まだアンケートなどによる調査を行っていないので不明であるが、非公式に問い合わせたところでは、ごく少ないようである。

最近の公共図書館には健康に関する本や食事療法、病気についての本、例えば腰痛・肩こり・胃潰瘍・貧血などの一般向けの医学関係書がかなり並べられている。それでも蔵書構成のうえでは医学の部門がとくに少なく、その選書、収集には本の内容の正確さや読者の受けとり方を考えると、専門家の助言が必要といわれている⁹⁾。確かに、健康法、治療法に関した本は非常に多く出版されているが、その内容は大手出版社とか、良心的出版社から出版されているものでも決して正しいとは限らないからであろう。しかし、図書館に所蔵されていない資料がリクエストされた時には、その資料の如何を問わず利用者に提供されるが、医学関係書は高価なため予算上購入できなかったり、大学図書館からの貸出が受けられずにリクエストに応えられない場合があるという。

自分自身、または家族が病気にかかってその病気や治療についての資料を求めるとき、まず巷の本屋をのぞき、次に医学の専門書のある大きな書店を探すことになる。本を見つけることができて、必要とする一部分のために高価な本を買わねばならない。医学関係資料を豊富に所蔵している医学系大学図書館と病院図書室が一般の人々に開放されていない現状では、結局は公共図書館を利用するしかないようである。

当院では図書室の一部分を患者と病院周辺の地域の人々にも開放しているが、とくに患者のためのコレクションとして、健康・病気についての知識が得られる本を収集してきた。

III. 患者への医療情報の開放と提供

当院のいわゆる医学図書館の約1/3のスペースに「一般図書コーナー」を設置したのは、図書室を病院の全職員が利用できるようにと、主として事務系職員のためにであった。まもなく入院患者からの要望があって、患者にもそのコーナーに限り開放することになった。医学関係の専門資料の利用は患者自身が医師の場合のみとし、その代わりに、患者が利用できるコーナーには病気について正しく理解できる健康・医療情報を収集して、病院図書室における患者サービスの特性とした。コーナーの開設当時は、患者教育を目的としての糖尿病、高血圧などの慢性疾患についての解説書とその食事療法の類いの本が多かったが、その後も必要に応じて医師の助言のもとに各疾患について書かれた本、小児疾患などの本を徐々に収集してきた。

一般の人が正しく理解できる医学、または病気についての本の選択は非常に難しい。それでも病院図書室では医学・医療関係の出版情報が得られ、著者や出版社についてもある程度通じていることが本の選択に役立つ。また、内容的な評価には病院の専門医およびコ・メディカルスタッフの協力

が容易に得られることが強味である。

しかし、病気の種類が非常に多いのに反して、一般の人々に適した医学関係図書は非常に少なく、非常に片寄りがみられる。難しい病気をわかりやすく書くことの難しさの所以であろうが、患者からの希望は少なくない。医師ら病院の医療従事者のための医学書は理解しにくいだけではなく、真に患者が求める情報とは限らない。日本語訳にもなった「君と白血病」²⁾のような病気や治療について患者のために説得力をもって書かれている本が沢山ほしいと思う。

一方、患者から自発的に自分の病気について、また治療についての知識を広く知りたいて図書館に情報を求める患者への健康・医療情報の提供について、どう考えるかが今問題となっている。

今よく話題となっているインフォームド・コンセントにおいても、患者には担当医からの説明を理解する知識をもって判断しなければ真のインフォームド・コンセントにはならない。その場合に必要とされる情報提供について、われわれ病院図書室はどう対処すべきであろうか。また図書館員としては誰からも阻害されずに利用者の「知る権利」と「プライバシー」を守ることとされているが、病院の職員として医師の診療や治療に協力をすべき病院図書室の司書としては、患者が正しく理解できる情報、そして患者が得た情報によってその患者にとっての最善の治療を行う妨げにならないでほしいと思う。

「病気に立ち向かう患者の立場になって、多くの医療スタッフとの協力のもとに、患者の精神的にも身体的にも病気の回復に役立つ医療情報の提供こそ病院図書室の Librarian の役割」とするのは容易である。しかし主治医やその他の医療スタッフに「知られたくない」として図書室に資料を探しにくる患者のプライバシーをどう考えるべきであろうか。また、その患者に『適応』した医学情報を提供することが、病院図書室が提供する

『正しい』情報と考えるべきであろうか。

IV. 患者のプライバシーと知る権利

医学関係の雑誌や専門書のコーナーを利用させてほしいとの希望もこれまで特になく、知らずに入ってくる患者さんも「このコーナーの利用は職員のみになっていますので…」と断るとすぐに納得されてきた。患者と職員のコーナーを設けたのは「患者に医学書を利用させられない」という理由より、文献上知りえた当時の英国での病院図書室が患者用と職員（医師等）用の別々の図書室または二つのコーナーを設けるよう保健社会保障局からの指導があったのにならなかったことが大きな理由であったと思う。したがって、患者さんからそのコーナーにない病気についての本をリクエストされた場合には、主治医の指導のもとに選択された資料を提供してきた。専門医でなく主治医としたのはその患者の性格、病状、提供された自分の病気についての説明の受けとめ方がある程度理解されていること、そして現在の治療方針の妨げにならぬように、との理由である。これにより確かにその患者に「適応」した情報は提供できるが、利用者である患者が本当に必要とした情報、知りたい情報が提供されたことにはならない。

約 15,6 年以前の文献では、「患者教育のために提供される Health Information は患者の病気や障害を管理する医師等の指示に添うもの」³⁾とされていたが、最近 Hafner は「かつては、医師と図書館員が患者の要求に合うように選択された情報を提供して、患者を『適切な』方向に導こうとしてきた。これは患者が、自分の身体の状態と関係のない治療の技術的な情報に惑わされないようにとの、患者のための方策であった」とし、さらに「しかし、1993 年の民主主義社会では、患者、その家族、関係者は、自由に制限されずに情報を入手する権利を得ることが十分に確立されている」と述べている⁴⁾。しかし、最近米国医師会が無作

為に抽出した病院およびメディカル・センターの図書館へのアンケート調査結果によると、13.4%の図書館では患者への医学情報の提供に医師の同意を必要とし、6.5%がその他いろいろな制限を設けている⁵⁾。Librarian として利用者の「知る権利」を尊重しながらも、医学情報に限ってその開放と提供に躊躇する理由を考えてみたい。

V. 情報提供のむづかしさ

一般に、「患者が医学書を読んでも理解できない」といわれる。わからない場合には、医師に直接質問してもらえれば、医師からの説明によって正しく理解してもらえるが、自分なりの解釈をされた場合には、間違った情報になってしまう。当図書室を利用している患者さんでも、自分の病気について本で調べたことを医師に知られたくないという人が多い。医師からの説明以外にもっと詳しく知りたいということで、医師の診断に決して不満があるわけではないが、医師を信用していないように思われたくないということであろう。患者のリクエストに「患者さんの病状にあった良い資料を、先生にも聞いて探しておきましょう」といった場合には、なかなか「お願いします」という返事はなく、大抵、「もう結構です」と断られてしまう。

また、病院図書室の司書は、公共図書館や医学に関係のない図書館と比較すれば、多少は医学・医療関係の情報に詳しいかも知れないが所詮素人である。しかし日常業務のなかで、医師からかなり難しい医学情報の提供を依頼されることがある。それでもいろいろ調べながらも躊躇なく資料を集めて提供できるのは、その情報の受け手がその情報が正しいか否かを判断でき、そして、適切な情報をそのなかから選択してもらえるからである。しかし、情報を提供する相手が患者さんの場合は、それは不可能である。

同じ病名をもつ患者さんでも、その病状や、自分の病気についての受け止め方は一人一人全部異

なる。病院の中にいて、われわれは余りにもそれが良くわかるだけに安易に医療情報の提供ができないのかもしれない。特に患者さんやその家族が患っている病気の症状にあわせながら読む時は、健康なときに知識として調べる時のように、客観的な判断ができるかどうかとも疑問である。

VI. おわりに

病院図書室は、医学・医療関係の専門家の協力が得られやすい。正しく理解してもらえる情報を揃え、そこから得られた知識が病気の治療や回復に役立ててもらうことが、病院図書室における患者サービスの役割であろう。自分の病気についてより詳しく、専門的な情報を必要とする患者さんへの情報提供には、やはり主治医や専門医の処方箋が欲しい。確かに、患者さんの「知る権利」にある制限がつけられることは否めない。しかし真にそれを追求するならば、「病名の告知」とインフォームド・コンセントのうえで行われるのが望ましいと考えざるを得ない。

参考文献

- 1) 西河内靖泰. 医学書の探し方私論. みんなの図書館 1994 ; 212 : 27-31.
- 2) Baker LS. 細谷亮太訳. 君と白血病. 東京 : 医学書院, 1982.
- 3) Hinthorne RA, Jones R. Coordinating patients education in the hospital. Hospitals 1978 ; 52(11) : 85-6.
- 4) Hafner AW. Medical library and patient information services, Introduction : Patient access to medical information. Bull Med Libr Assoc 1994 ; 82(1) : 44-5.
- 5) Hafner AW. A survey of patient access to hospital and medical school libraries. Bull Med Libr Assoc 1994 ; 82(1) : 64-6.
- 6) 戸津崎茂雄. 医学・医療情報の提供 : 医師の立場から. 医学図書館 1955 ; 42(1) : 3-4.
- 7) 山室真知子. 病院図書室における患者サービス : その専門性を探る. 病院図書室 1994 ; 14(4) : 159-62.